享保六年辛丑　一七二一

六月浦賀奉行を置き江戸内海出入の船舶を檢督せしむ又長崎に武具庫を築き鉄砲百門具備せしむ

八月江戸白山に藥園を設け東西各種植物を栽培せしめ阿部友之進を舉げ掌之

吉宗將軍常に藥品を外國に仰くを憂り此年國内に産出敷種を試植す友之進右經任手將前奥州南部人にて東上の海路を経て颶風に逢い支那に漂着して福州に至つ十八年其間洞く東西の藥物を研究し帰朝の後江戸に留り本草學を教授す此時町奉行より本草通達の者と謂う友之進乃上書して藥物の長者を選ぶを述ふ將軍一見直に召て藥園の事を掌らしむ

同七年壬申　二七二一

七月尾張藩士近松彦之進（名茂矩通称彦五郎）火技要録を著す

南蛮人堅松より傳へたる母子銃使用の技術にて道元九郎右衛門吉田九郎左衛門等これを尾張に傳ふ茂矩其法を研究し此書を著作し更に自得流を立つと云ふ

野呂元丈北國採藥して北陸方物を著す　片岡右衛門

十二月丹波苗山藩士萬尾六兵衛時春規矩分等集を著す

今等者山海國城高岡廣狭厚薄其外切畑之規矩隨所節而含量眼路之数度也とあり下測量用器の図説を載す細井廣沢序曰家少好事得測量縣地者之法規矩諸人而書成其原出於絶域萬里之西至紅毛来我長崎長崎鎮臺萬國傳之去京馬原氏物聞中筆達士之蘊多肯絶域畸人之興

同八年癸卯　三七二一

和蘭人に命ありて西洋産の馬を數さしむ

阿部將翁等關東諸州採藥明年野呂元丈等伊豆七島採藥

岩永玄昌と長崎醫人なり兄磐玄と同じく大坂に於て南蠻流の外科を行ふ

磐玄は宝徳中大坂に出て吉田・京都初年大坂に来る共に其算法を傳へて玄昌堂し学し明治に及へり　孝五四之墓道右陳に曰く門人二百餘名其子文穂い孝學を伝の集学稿りて安年孝徳安寿を開けり

同九年甲辰　四七二一

二月和蘭甲必丹例參桂川甫筑出命せられて和蘭人と對話す

南筑法眼長崎遊学中日常の會話々通目せしものと覺ゆ

五月朔長崎に於て夏至日午の表彰を實測す

表木八尺にて長影一尺三寸八分七厘先達儒者向井元成請家学を継て星學を竹山北辰高度を測て三十三度餘とし赤道距離を亦三十三度餘とし又北極を距ること五十七度強なりして夏至運赤九度半強を距ること五

西川如見七七八歳の時長崎長崎に学

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

筑後守從五位下源公之墓　明治己面四月新井白石改号の碑野出たり墓誌なり尾張上石二枚其一此十一字を刻す
源公諱君美世號新井考號正齋母藤氏明暦三年二月十一日生於武州江戸享保二年五月十九日終屋於城北報恩寺中年六十九
墓銘倉氏子男明卿二女官遠人　高さ二〇白石二子長大元明卿　記　三宅貞介

紀伊藩大砲役佐々木勘三郎　盛江戸ヲ召サレ鎌倉海濱ヲ於テ大砲丁火矢ヲ放射ス
同し藩の鉄砲所戦役の吉川源吾兵衛と右小者あり和歌山郊外の的場を築き発砲練習を行ふ或夏の暑とも砲発はしきりめつて午四近の田畑其他生の小果書く書り度つ面蛙共然所して主人毎日の御暇古なる島へ見合る水やる夏ならずかゝる迷惑なる仇俗と源吾兵衛曰く氣の毒千萬なり得し我等も職業なり銃砲打つ夏を止めり夏し或し鉄し夏る一茶あり酒カ夏其居たる小鉄を酒樽つ浸けて見ると意外な風味もならん」其ほを浸ひしる果して美味の清物となり今し和歌山市の特産として四方へ賞美せらる其名を源吾兵衛と称ふも是其起因なり○吉川と寛文中紀藩の稚は七しまり八四家臣を為へ代ら源吾兵衛なる此人清の是何代の源吾兵衛なりや不分明なり因て翁を以て若し此他の所記し以て諸新ゝす

八月和蘭人より椰子樹苗並ヲ藥草十八種を長崎ヲ渡し来ヲ是ヲ江戸ヲ送致せしめ白山藥園其他各地ヲ試植せしム
和蘭人ヲ注文せし西洋産馬五匹并ヲ馭者ケイズル来る九月幕府より御用馬之儀ヲ御尋
條々として十五箇條の質問書を長崎ヲ送付すケイズル答詞大通詞今村市兵衛和解以上

新井白石　六八
七月ヒ江戸城黒和御

四月和蘭馭者ケイズル甲必丹例参ヲ隨て江戸ヲ来ル
文那天學者梅文鼎所撰曆算全書相載す長崎奉行より幕府ヲ進献す
本書ヲ注象法數曆學算學四門ヲ分ち計三十種其例言ヲ西曆之巧変原古法而精之如幾何三角割圓八線以及一切測之術ヲ文鼎号勿菴歷算書中最精密者也爲回教博學考徵曾旅行地球回京精曆數實草中西授制人不傳之奥又為海内宗匠光是梅氏著書曆學疑問三角疑問二角疑問等個々刊載所刊曆算全書と称し行了特年今五月中旬元生ヲ到至ヲ持ち已全書ヲ長崎ヲ送付ス
上申ヒ一冊更ヲ長崎奉行所ヲ全書ヲ献ス又本書ヲ化て刻ヲ作製曆學私言等の著作あり
生涯ヲ成ヲ刻ヲ元生又本書ヲ化て刻ヲ作製曆學私言等の著作あり

十月桂川甫筑ヲ阿蘭陀藥品ヲ製煉ヲ命せらる

梁崎遠有　六四
十月村ヒ江戸ヲ地蔵寺院

測量秘書　細井廣澤撰
廣澤名知慎稱次郎太夫遠江人能書ヲ以て世ヲ聞えたるも傳者ヲ一て殊
数語筆記より採りし者多く天文學數を例すること多し○寛文江戸護國の番者遠近道印と共ニ廣澤の匠名ト傳聞ス

紅毛火術錄　前出
徳川幕府初期　盛代此火術遠傳紅毛而至本邦紅毛地例西南風土無異至其法度用月所照霜露所侵用之有効故紫質古河氏述其要人實習語録
新限其要以日録可傳子孫子以国牛伝録之意書實録當曰紅毛火術錄　小沢氏撰作其録ヲ聞之永而不絶事係丁未小沢氏使役美江戸ヲ使千歳世期録留小沢氏
北蝦夷意以日録可傳子孫子以国牛伝録之意書實録當曰紅毛火術錄
古河治郎左衛門貴小次郎本大学忠美ヲ本ヲ江戸ヲ使ヲ以ヲ此川留ヲ江戸の人名ヲ一本調

規矩神術二十箇條　河原貞穎撰
右印可二十一箇條拙稿十二箇條者清水氏奥德鈞其玄以所為以心傳心也其法皆係口傳故無書可傳或惜乎經年久則失其傳也必矣
因社記事注角以授子孫耳　享保十三年戊申春二月　清華堂
貴輔寺風雪子江戸人清水氏の規矩術を此人の依て世ヲ行ふ蓋多の秘法を故聞して以て後生ヲ傳へたるも其功也大なりと云ふ
無共其拙稿十二條を傳筆記せざるを竟ヲ傳ヲ十ヒ

介度餘術　松宮俊仍撰
俊仍石親子寛名俊明詳註ヲ住小規矩術を高尾時春ヲ學ひ諸家の論述せざる所ヲ記して此書を作る書中多く
和蘭の說を挿了且驗測の說事術を論及して測地術地理法を説へ一的ず後年ヲ立り幕府より罪せられ江戸ヲ捧り[illegible]

向井元成　六八
二月ヒ長崎奉行
河原貞穎　著作

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

享保十四年己酉　一七二九

四月和蘭人より留字布流と云ふ器物を幕府に献ず

細き銭筒長さ六尺許一端に孔十枚を穿す
璫字書流比樂里保中阿蘭陀人以璫字普流之器一具献大樹此器之為体以之通言語則不管人丈不変聲音而響徹三里其但對語同席而話實妙工所製作可謂奇異也大樹命工製之於江戸亦如陽十又五丁就令聞聲音遠絶不能聚耳言語之明不可得言一時見聞稱其奇俄而用一助不可無此記也○此器の名稽後に考証し更に其造を詳にせし一段を面白く紀したり但但相隔百年軍用の器思変して悪徴の料と為る悉千可慨

九月和蘭馭者ケイズル又江戸に召され清御殿にて馬の調馭を命ぜらる　通詞今村市兵衛

騎法療法の書を和解ナベしとの命あり　阿蘭陀馬書十五巻を也○蘭書翻譯此書を最先とすべし

中根法軸　但之丞　芳術　父元圭に代て将軍下問に対し開方盈朒を作る　朔而月見東方曰朒晨而月見東方曰朒音軸　是所未作之法也　後藤名屋作

大坂算士大島喜侍より数學九章の傳を播磨門人平野養甫に授く　養甫名屋作

方田粟布衰合少廣商功均輸盈朒方程句股の九章なり○喜侍稽喜右衛門号芝園中根元圭の高弟なり数學に其自負すること斯にて諸国を巡遊して摂津和泉播磨阿波吉門人甚多し其住相模にて大島流算術と云ふ　大島喜侍長子未詳

長崎人西川忠次郎　正時　如見の子なり家學を修め江戸に出て、星暦學を教授す此年天経或問に訓點を施して開版す明年又天文名目抄を刊行す

天経或問は支那天文書にて清の西教の祖なり四庫総明書目に此集は天道運行皆設問答一一根其所以然能有理致其不接古聖為特説以見功

享保十六年辛亥　一七三一

三月和蘭甲必丹例参覲官丹羽正伯をして物産の事を詢問せしむ

狂夫の言も聖人の擇ぶ所なりと云ふ因て物産の事を問ふ　正伯は本国より西の方アメリカと云ふ国の産物の和名を問ふ　其虫の名をコンシイニールと申すと答へたり

江戸醫人後藤梨春物品目録後編を作り和蘭の動植物に及ぶ

梨春名元生稼太冲号杜詩庵其父養逸より本草學を受り先是支那の本草細目を補記す　作る和国産外国産と区別し外国又支那和蘭二部に分つ其乙部は後に其他を加て後篇を作る

尾張士人佐枝尹重鍍砲茶詰を著し利器の當否を論ず

尹重鍍砲之連發法軍學者より當て伊勢に住居藤堂侯に仕へ其後致仕して江戸に出て軍學を教授す

享保十七年壬子　一七三二

五月中根元圭奉命江戸下田両地に於て日出の時差を測定す

奥写改暦以来四十八年吉宗将軍常に日出の時差及南屋を測量すべしと欲すれども其人を得ず竟に元圭の七十一歳なりしを撰して其事に當らしむ元圭老耄を扶けて伊豆の南端に来住し奥羽晋に差遣りて測量術を教授す　元圭名盈弘江戸の人芝に住して測量術を教授す

量地指南　伊勢人村井大輔撰

量盤定規浮貝等の用を説く自叙曰く此編一紅毛僑来所の初問にして中華正統説の東漸にて其始なり後又磁針の應用を述て後篇とす　本邦又量地元法を著す書永中なり

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

享保十八年癸丑　三七三一

正月暦算全書訓譯告成中根元圭奉命以来八年

運部賢弘其書を敍して曰く暦算全書乗言西洋暦学有達其基第三角線割圏八線諸法享保丙午海舶舶来以聞弘受通暦学奉命校之、恭村如以老嚢馬勝盈意乃繕寫一本今年瑋中根氏詳之匡謬曲正覆比之中夏五湊源孫史相與賞鑑而國家敬事曆象耶穌不問書之好否一切賛之西洋暦之不謬以之大統昭代文運日升蓬及暦所崎陽諸禁書之免暦算全書因至焉可謂偶言西書之助矣下略

中略元文元年

享和雪堂本

文政暦象考

九年丙辰

同十九年甲寅　四三七一

五月江戸人島田道桓番規矩元法町見辨疑を著し各術一々問答を設し諸器の用を示す

西川正休叙曰く田子少小志子所教學無匪比近子宜稽天文地理漸入其室既編此書請予刪定鄭逵上木、公之世四子曰以世俗之誤者之傳之生也可吾矣用非衛語君子也廻解通世俗以用于世乎望加愛於說中章章於說世方而通世俗情以通爲主乎若不通爲無用世數也柳田子精功尚數今逢行之世嘉清暢此斯之振興歟云〻

柴水雲閣一八

公文元年

同二十年乙卯　五三七一

江戸人青木文藏所著蕃書考吉宗將軍の親覽する所となり二月命ぜらり上木して世用に供

布せしめらる

文藏名敦書号昆陽少より京都に學び享保二十七年吉宗を以て江戸駐の藩家を立つ至誠至孝父母各歿後三年文藏毎日謂小例地海島其氏食を忘し親喪の道と甘薯を植つ在りと知書を著す明力加藤於直敵られを奉行大田忠相僕つ遠き之を行大田忠相僕つ遠き之を世用の書なりを奏納され刊行の事宜となつ於是各地墓薯を白山藥園つ植しめ奉つられを諸國に播布す文藏乃喜嘆を目黒瀧泉寺後に建つ其文　享保二十年青木敦書象今種甘藷同人嘗て曰甘藷先生墓○寺後の碑は此陽先生書刻奉行なり刻碑を大鳥社側に置き若後喜現に其法墓表を〻ひ〻り〻碑を〻

三月和蘭馭者ケイズル又江戸に召され滯留半歲八月長崎に遣り九月帰國途死

ケイズル初来なり十一人年を及べど其勢を懲かべしとて待々本部三郎左衛門を遣はし長崎の船中に於て死没のれ命ある毒殺され書略の品悉奪去し遣はし長崎の船中に於て死没のれ命ある毒殺され書略の品悉奪去し

運ばこ其侍妾の船中に於て死没のれ命ある毒殺され書略の品悉奪去し

両賜ふり其家財つ悉小たり○和蘭の貢馬し蘭後二十七匹を及べど明年銅十萬斤を下賜せらんなり

書水雲閣一八

元文元年

辛酉　六三七一

三月猪飼豊次郎為天文方

以人事右座組より管作御用手傳となり流川事右門國書二代の後見役を勤む

二十年後地で天文方の事サラ〻

長崎大通詞名村八右衛門前通詞目付を為す

此職元禄七寅創置九年前今村源左衛門補之

名村其後任なり

何蘭陀〻〻何蘭陀文字紙ガタ〻文字ハ〻〻ヤ文字を三色を用ひ青御奇校進程処何蘭陀文字ヤリ用ひ色を書全有之其傳無皆用文字を〻〻〻

十二月紅毛天地二圖贊説　長崎天文者北島見信撰　上巻皇国説　下巻不傳

見信ハ慶長拉門人ニテ享保年間ニ長崎ニ住ス　見信ハ長崎譯家西善三郎其業ヲ私心法ヲ立ル所ノ北島見信ト云ヘル佛生アリテ翻譯天地二圖贊説ヲ作ヘル書ヲ著レテ官ニ獻シ奉リシ由此皆西氏ノ力ニ因レリト聞クトモ其ノ書遺レタリ

幕府新ニ大筒役ヲ置ク鐵砲方井上氏ノ世職トシテ隔年鎌倉由井濱ニ於テ大砲發射ノ演習ヲ行ハシム又江戸近郊ニ於テ將軍親閲ヲ供スル事トアリ　井上氏前ニ出ヅ

肥前江戸砲子鉄砲測ニ長崎高島ノ人ヲ以テ御鉄砲役井上和富内藤式部町打ノ試ノ人ヲ以テ高島ノ人ヲ以テ

三月阿蘭陀本草和解　野呂元丈所記

主ヲ寄内方依事和蘭学是其首手草一書

甲必丹ヤコブハンゼンマイ書記ハンゼンフリイハ外科医ヒップポクラトルムスルス 通詞吉雄藤三郎

此書名イヨンスレンスと云ふ即作者の名を直ち書名とす八十一年前刊行と云ふ

但し阿蘭陀国開闢日今年千百五十七百四十五年其中興ヨリ千七百四十一年立ツ此書十六百六十年ノ板行ナレバ今年マデ八十一年ニ当レト即時ニ答フ

此書薬物ノ為ニ作リシ本草ニアラズ故ニ功能ノ事一切ナシ形状ヨリ書ス文字多クハ「テテ」ヲ略シテ解シガタクレ云

三月和蘭貨幣考　青木文蔵所撰

和蘭文字ヲ和蘭人ニ学ビツツヲ和蘭金銀銅打像ニ法ヲ問ハシニ因ル一小冊トナレ度重所ノ所記シテ和蘭貨幣考ト名ヅク

阿蘭陀本草和解　野呂元丈所記

本書所載二十三種毎品和蘭名羅甸名及和種名ノ後各ノ所之前書ハ別書ヲ以テ別ニ記ス以下同シ

三月和蘭話譯　青木文蔵撰　和蘭学文科第一書

阿蘭陀ノ発音我国ト大ニ異ナレバ阿蘭陀文之考合ノ委ヲ阿蘭陀人ニ問フニ口授ヲ考ヘトレテ筆記スルノ External 其大概ヲ示シ和蘭話譯ト云

話我国ノ言語ニ比スレバ甚タ創シ且助詞多クレテ會得シ難シ因テ阿蘭陀語書簡一篇ヲ譯シテ其大概ヲ示シ和蘭話譯ト云

阿蘭陀本草和解十七種　野呂元丈和解

此行甲必丹より元丈へ与る石膏製の銅管を贈る其箱書元丈ヲ記ス阿蘭陀人ニ問フニ

別ヲ又蘭字今本表紙あり蘭字を以テ撰文字を書き堂別ノ口ゲンジクと片仮字を添ル又鶴毒松竹の字ヲ書ケリ

バンブウ云蘭名を片仮字ヲ評ヲ以テ野呂元丈撰ヲ見ル

長崎小通詞今村市兵衛　明生年二十五歳　東湖藤義寧撰

市兵衛ハ通称右衛門美生ノ子なり其姓名ハ明生字起風号一雲

物用通詞基礎過也為人才弾且ル多書其考証識進逸従容悠遠之間本宗失其容美と見ル

和蘭事略稿　東湖藤義寧撰

此人未詳同時代ヲ幕藩家松永東湖あり復学者林東湖あり共ヲ其人ヨリ多シ

附言　夫和蘭国ハ海蔵尚偏ニ既基ヲ貢ヲ来朝ニ編ム国字アベセトヲフニ十五字其体某の如く格の如く其かもの我国の伊

呂波ノ如レ譯官ト其文字知何ナルヲ知ラズ区区ニ西動産物全ク著ヲリ用ユルモ其国書ヲ詩ヲ密ヲ解ズルヲ能ワズ本草名

物ノ学ヲ其何ノ地ノ生ズルヲ知ラズ是レ故ノ国書ヲ譯ムル能ワザルニ因ル使ヲ問ヲ何ヲ可ラザル因ル若レ対事

者使文字ト言語ト通シ其論説ヲ可ラ能ク法ヲ所ニ利スルノ一ナルベシ愛ニ青木某生アリ博識ヲ志アリ使話

ント欲ヲ通シ其起ヲ偶ヲ識ヲ千載一遇ノ奇見ヲ上ニ及ベシ不得已生ヲ為子相共ニ著学ヲ補充シ一書冊トナレ後ノ君子ノ為ニ

和蘭文科ヲ学ヲ青木品偶起ヲ偶ヲ識ヲ千載一遇ノ奇見ヲ上ニ及ベシ不得已生ヲ為子相共ニ著学ヲ補充シ一書冊トナレ後ノ君子ノ為ニ

品開　和蘭文字基考ノ評略有ノ外　矢度機月念之

天文臺を江戸神田佐久間町ヲ建て将軍親製の簡天儀を置く

元禄己巳天文方渋川春海ヲ天文臺を其私邸ヲ設置セシヨリ五十五年迄時暦ノ官設となり測量所と稱ス後四年天文方を吉

社奉行支配より所ヲ天文臺ヲ若年寄の直管トス○寛延江戸図ヲ天文臺ハ佐久間町二丁目三丁目の北ヲ在リと就江年表ヲ見ル

阿蘭陀本草和解十一種　野呂元丈撰

和蘭話譯復集　青木文蔵著

此書ハ阿蘭陀人通ノ留学シテ来ルヲ送ケレバ華夷門ニルヲ

青木文蔵ヲ官職を賜て長崎ヲ往き阿蘭陀文字を研究す仍て和蘭文字略考を作り復命進覧

蘭学修業ト称ヲ天其通ヲ問カント欲シ人其時、遇ヒ人ヘ十使蘭

蘭学修業ノ為トシテ青木品偶子ヲレラ長崎ヲ通学セレノ給ヲ

レガ譯家ハ性来ヲ博記スルノミ、レヲ長崎ヲ通学セレノ給ヲ

親ヲ使邸書ヲ読ムヲ詩レ給ハザリシ故ヲ十ヲ品偶子ヲ長崎ヲ通学セレノ給ヲ

汰語説ノ意味ヲ略了解レヲ和蘭話譯和蘭文字略考ヲ著ヲリ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

延享二年乙丑　一七四五

三月阿蘭陀本草　十八種　野呂元丈和解

長崎阿蘭陀通詞西善三郎ニテ吉雄幸左衛門ニ本木仁大夫ニ三人和蘭文書讀譯の特許を受く

（蘭學事始）「和蘭文書の譯は、吉雄幸左衛門・本木仁大夫・西善三郎の三人に限り、他人の譯すべからざる事、厳重に仰せ渡され、…」

九月吉宗將軍退職　六十五歳大御所世子家重ニ十九代將軍宣下

同三年丙寅　一七四六

三月阿蘭陀本草　七種　野呂元丈和解

和蘭櫻木説一角説　青木文藏撰　出二説數書延享三年和蘭人ノ所ヨリ

十月改暦の令あり天文方渋川六藏及西川忠次郎二人して其事を當らしむ

江戸にて既に三年前に京都にて改暦の令あり、又既に二年前六年の測定を以て暦法改りたるべしと令せらるるに、六藏・忠次郎等五世孫

十一月和蘭文字略考再修本　青木文藏撰

数書等ノ和蘭文字略考三巻ヲ著シ官ニ上ル不幸ニシテ今存ノ文ハ、西ノ書和蘭人ニ交ル日浅ケレバ和蘭文字ノ等合悉ク通ズルコト能ハズ以テ集メテ三巻トナス官、アル本ト用ヒカラザレバ其片端ヲ記ス後ノ君子此書ニ因リ詳きナル事ヲ為ハバ數書ノ大幸ナラン

同四年丁卯　一七四七

桃園天皇御宇

三月阿蘭陀本草　十五種　野呂元丈和解

六月野呂元丈新規被召出寄合御醫師俸米二百俵

七月青木文藏評定所勤役御儒者被命俸百五十俵

和蘭商船漂流して肥前平戸領六島ヲ着く小通詞

長崎ヨリ引渡ス　後五年寺三郎再ビ大通詞ト為ル

桂川氏ヲ甫筑法眼初仕ヘリ世ヲ幕府外科醫官ヲ傳テ八代ヲ及ヘリ

初代甫筑　初数二代甫筑國章三代甫筑國利四代甫周國瑞五代甫筑國寿六代甫賢國芳七代甫周國興八代甫策國軌

桂川家ハ代々甫筑ト称シ代々將軍ニ仕ヘ今ノ當主ハ十九代目ニシテ現今ノ當主ハ甫周ト称シ代々將軍ニ仕ヘ

和蘭文譯第一集　青木文藏撰

此書家藏十冊其本を失ひ三集六集八集九集十集の五冊を存す其年曆を推す時は此年第一集の相當す故る書名を掲ぐ
原書又へんコンスト（密字義）といふ其中の文意訣詰を受け而して筆記したるもの第三集の條下を見る

二月天文方澁川六藏等改暦御用ゐて京都より上る四月摂町上皇崩御因て中途歸東

江戸觀測三年既に單うれわも上京せざりしより地つる該間る迄い條乘す六藏等て改し事國書を洪其後を承け故實所用也繼承す

和蘭文譯第二集　青木文藏撰

阿蘭陀本草和解　野呂元丈撰

本書所傳止す此其中鉄筆跡已已不知其事由明年有地医発ニ入ゝ
禁水用書弱民知二初信和蘭學三年譯出六初新志奇有禁水依詰之萬暮中所收西洋藥物多而未譯草類圖曉摘若者四十餘冊
是當所聞阿蘭陀本草訣主所力加是都一詰不及遠山此書藏遠山此書例之官府藏本不存于當是以不信ゝ世故付耳其名不拔其書
多年為識場者聞白井忠藏之借未一閲意自壬子歷尾湯奏至年甫貴句又五日分自坊寫僅供三又神位白井氏原本在内閣文庫

三月和蘭文譯第三集

今春スペルコンストの内阿蘭陀人ゝ聞うモノタ記レタ和蘭文譯三集ト云
青木文藏常ゝ國字譯問所を設置せんと心計せしを年吉宗特命の愛を受け以其事を行めすして止ぬ

十一月八日冬至京都西八條梅小路司天臺ゐ於て陰陽頭土御門泰邦及天文方西川忠次郎澁川圖書等立會ゐて立表測景の規式を創ム

此時所用の測器を八尺鉄表八寸鉄表是又四近傍社天傳清用象考敷極とて京都方助手ゝ西村千助磯永貞四郎ゝて江戸方ハ山路
澁井二人及ア牧善太郎加け然ゐ志次郎一人合語ゐ而れも陰陽ゐ怒ゐ船れ江戸ゐ召迄ゐ
西村千助ゐ偶一芳遠里至都藤ゐて數學ゐ精し其所地和清真ハ建部賢弘の高弟なり
命と水て土御門家ゐ信待す　ア牧善太郎ハ仙臺藩士名但秘方ゐ遊天高山路の門人ゐて間流算術の達人なり因ゐて玉ハ後未仙臺
封内ゐて士庶ハ無し算學盛ゐ行れしもア牧の遺功なり

和蘭文譯第四集　本傳

青木文藏定年和蘭の銅版（コンジン鉄鏡スペルを見て前者貨幣考ゐ所記）

林子平及直德川家人岡村源吾兵衛次子なり父有故棄祿因稱林氏是年兄嘉膳跋仙臺藩士為ゐ子平時年十五後三年是兄仙臺移住

因村良通食祿六百石書物奉行ゐ同僚何某平祿の金して同盟を集ゐ因村の計ゐ左ゐ連判帳を示す良通一見一路見去墨意見の
在ゐ弱ゐ明朝真未ハよゝ吉ゐ即位少老黒候ゐ密訴し此事露顯せて連判者悉罪せられ人ゝ一大事なり果し思ハゐ強市人一人へ
切責ゐ黒ゐ逐電せ人ゝ中ゐ加老首者ゐ堅制張本人ゐ良通一カ下ゐ斬殺し連判帳を丈中して跡を晦ゐ因村氏亡ゐ元文度中
其月の事なゐ學問陸ゐ黒意是を去ゐし駿ゐ建速し始めゐ江ゐ寺小屋
ゐ十餘年是駿ゐ仙臺移住ゐ子及び迎へられて天命を終ゐ頁通ゐ心を國典ゐ潜め馬戒考十巻を著ゐ又仙臺國誌ゐ著ゐ林子平ゐ父ハ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

同四年甲戌	一七五四	室暦三年癸面 一七五三

和蘭文譯 第五集不傳 青木文藏撰

讃岐人平賀源内先是長崎ニ遊學シ和蘭諸藝術ヲ習得シ是年江戸ニ出ツ

源内名國倫字鳩渓初称孫三郎後称源内風流ニ徒ヲ招キ其所後藤昆山ニ質ス昆山曰ク君ハ能ク人ヲ面并使ヲ用ヒル京都所司代ヲ其侍医小杉氏ニ請特ヲ細ク罪囚ノ屍ヲ解ク麦ヲ得シなり。解剖事(一七五五)脈ヲ示ス

長崎ニ乞ヒ奇品ヲ求ム平賀ハ和蘭ノ事物ヲ習得ノ其江戸ニ出ヅ平田村元雄名寶字藍水江戸人寛政医業元雄伝為物学ニ名ヲ聞ル

同御勘定…
三月江戸人敬物教者

東洋名所能漢方医ヲ書テ漢籍内風説ニ徒ヲ招キ其所後藤昆山ニ質ス昆山曰ク君ハ能ク人ヲ面并使ヲ用ヒル京都所司代ヲ其侍医小杉氏ニ請特ヲ細ク罪囚ノ屍ヲ解ク麦ヲ得シなり。解剖事(一七五五)脈ヲ示ス

閏二月京都官醫山脇東洋小濱藩醫小杉玄適と始て罪囚の屍體を解き臓腑を實驗し仍て臓志を作り我國解剖の擧て東洋を最先とす 後五年己卯刊行

四月和蘭文譯 第六集

今春スペルコンストの内閣陸人ヨリ聞クモノヲ記シテ和蘭文譯六集ニ云 此條青木敬青識

十一月寶暦甲戌元暦頒行 勅曰貞享以降距數十年用一暦推步之法與天差矣今立表測景定氣朔而治新暦以頒之於天下

寶享改暦より六十餘年暦家の天ヲ改ル、六刻有奇数ヲ九年前暦作設法ヲ命ヒリしなり吉宗将軍襲職の業初より改暦の事ヲ若密ヤしに其事遂ヲ成ス位乗後四年ヲ以テ遂ニ之ヲ行ふべし

同五年乙酉	一七五五	同六年丙子 一七五六

和蘭文譯 第七集不傳 青木文藏撰

七月江戸天文臺ニ於テ秋分點測定 十月冬至點測定

正月天測御用として流川圖書山路彌左衛門再上京先是西川忠次郎蒙罪閉居身亡事絶

今春スペルコンストヨリ聞ノモノ

西川忠次郎 六〇
青木敬はこれを知らず

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

四月和蘭文譯第九集　青木文藏撰

今春スペルコンスト之内聞るものなり

六月天測御用濟まて法川圖書山路彌左衛門等歸府

九月江戸天文臺を廢す設置より十四年

是月田村元雄出藥物會を湯島に開き明年又神田に開く　物品陳列會の始

小濱藩醫杉田玄白二阿蘭陀流外科を以て醫業を聞く

玄白名翼字鶴鳴祖父祐以漢方運操仕酒井侯玄白外科を修の人と医官西玄甫なる就き和蘭医方を學ぶ是年侯より別俸を給りたれも卿外の聞業を乞い君父の名許を得て何之聞業は之を学ぶ相談の向人清都博士

和蘭甲必丹の一行り大坂にて竹田カラクリを觀て感嘆せし蘭文あり八月書言

摂津名所図會に三人立見の画あり年代相違なれと其趣を見るべし上方在役を勤せり

おらんだより是しりいまゝ日でみめぐ天地も動く竹田からくり

三月和蘭文譯第十集　青木文藏撰

今春スペルコンストを内阿蘭陀人の聞りをもりり記しり和蘭文譯十集トス

木書所載十集にして正り花陽山手の十一歳次の明和甲申の位り答館對話の事あり十一集以下有之不候未詳也

八月和蘭人より木綿や種子二万粒を齎来て長崎に賀易す町年寄高木勘右衛門より是を江戸に進献す

九月平賀源内出物産會を湯島に開く

武江年表宝暦年間記事に硝子紙外国の物なりを蘭人持渡り中古長崎にて製すり事を得て京都大坂に傳へしを近頃東都にも其職人多く出来り昔の器を製し活業とすり者数多あり喪尾庵記聞雑話云ビイドロ蘭語なり多くすれしとかゝ詩なりと

三月戸田齋宮六五大坂に物産會を開く品数二百四十一種文會録一冊を著す　明年又開會して浪華物産目録を作る

書言字考地山備前人医業を大坂に開き本草学に精し其門に種して草医費宮といふ

四月家重将軍に退職し世子家治に十代将軍

昆陽漫録に青木文藏に元文以来三年餘年隨筆なり由る和蘭記事三十五條あり

野呂元丈肖像　義大休所写元丈自題其経歴　其文左、

予生数州栗原郡成二十八年任庚子春本草都講命来藤諸明延享丁卯の秋宮医芝義公之院也草素守衣作堂下共君恩書大貴今夏傷暑至於危易安地因請写真于義公已成面目容貌通真情以其春和已遠写既之豈可不感歎哉恰可録己野呂元丈六十八歳自記

歳主計頭忠通の領地二千石紀州藩侍の士なり例役して将軍近侍なれば野呂青木を推薦して和蘭学を従事せしめしと此人なるべ

寛延己巳六十一歳なり故是一大休と云フ是年七十七歳

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

平賀源内…物産學を以て世に立たんと二月祿仕を辭せん事を請ふ九月藩侯和平其請を許せども他家に再仕する事を許さず

年號即明和元年甲申の項に出る精性度春有隆七月今迄仕掛候御用筋故島恩召所恐懼を以て御暇願仕候ハヾ千万難有仕合奉存候右之段宜敷様御伺仕呉候ハヾ難有仕合奉存候九月江戸御役人より其方義医業ハ掛違仕候ハヾ御暇願出精ハ出候ハヾ御暇願出候ハヾ其方義ハ

三月天文方吉田四郎三郎補暦御用として上京五月病歿　六月天文臺を江戸牛込に再置蕙庵後上

七月京門及典方奥村郁大夫印後暦に所用を達八月番代所用作る手附者馬奠を置き天刺間祭

紅毛読（オランダよみ）　後藤梨春撰　和蘭の地理風俗器物を記録し和蘭語の雑録

自叙曰西洋諸国東方に交通し天文地理人生日用に及ぶ其学甲乙他則「且経歴諸国」有無交易其功亦小矣少年に未我東方而尚買西番入東都青紙土豆其蕃舶漂流之間之得教聞使所人物道域録記者記有年今年裏正堂小児之現南乙酉縁日

動植礎物十譜　平賀源内撰

例言　曲直瀬一従義印根言所以方言俗及漢名畫名之由

田村元長中川淳庵宇田川玄随等薬品會を開き目録を作る

元長名孝之字而周元雄之子なり吉雄名登字徳周津山藩医其父を随伴して出府

奥平侯醫前野良澤曾て和蘭書幾片を見て其文字を讀まんとの志を起し青木文藏に就き

其讀法訓法を受く時に年四十四歳

良澤名建谷其姓氏角父象庵正元の後を承し元文五年に生る○江島細倉に前野蘭化傳に是隙先生回想志之日、與余符合、と云て四十七歳にして記せり蓋四十七にして解き得たりより遡る細書の記録に遡る是迄を生ぜし覺切且良澤四十七歳に明和六年にて其年十月文藏及び其友義の短日月なりしに敢し故に良澤起志を翌年とす

磯永福四郎　上作
二月高　墓地を移

二月青木文藏に書物奉行に補す別俸百石加賜

和蘭甲必丹例参前野良澤に杉田玄白に二人其客館に至り大通詞西善三郎に就き疑議質問

和蘭事情に明和初年の事なりしと但例の如く蘭人江戸へ来りし時良沢玄白等「今日蘭人の客館に参り通詞に逢ひ和蘭事情を聞き聞伝を問いまの乙なりしに前年に渡来の者に問ふ事に移り易き事なれども我国に同通せたくれい無る使器の行われ其不大通詞西善三郎の蘭語習ふに由申述べる事を聞て夫れい必所無用なり何故にいなれば使節を製て理学にて頭を事なり其我筆学の門閥に人の物なして学者易き書籍し難し天祐野呂青木両君などに御用って毎年此客館へ御越しなれば一方ならず御出精なれ共はかばかしく所含無まわらぬなり選択すまゐし所無用の方法つべしい異見したりとあり○かしこ為るも何計り人前野杉田二人後日通詞の手を依らず和蘭書翻譯の見種たらんとも

水戸藩士長久保源五兵衛主殿長崎に行役し和蘭館に於て始て昇降図式を見たりし其日後日記を見わ

林笠翁　六月
六月二日仕事終宅尾

三月和蘭甲必丹例参前野杉田二人其客館に往き外科醫バフルの刺絡の手術を見る

大通詞吉雄幸右衛門なり吉雄オバフルに学ぶ長崎に有て外科治術の蘭書を多く一年一回に読び乱れ解なれども為に拙なり拙術を学ぶ一年一回に読び乱れ解なれども為に拙なり拙術を学ぶ一年一回に読び乱れ解なれども為に拙なり拙術を学ぶ

高遠藩士坂本孫八郎（後号天山）其家荻流砲術師範なり孫八郎書に渉り易理を以て砲術を研究し世に立たんと是年大坂に出づ年二十四　後年後久門象山と易理を論じて砲の用を説く

長崎大通詞西善三郎に蘭人ヒトルマリン所撰辞書に訓譯を施し後学に便益せんと對譯に着

譯せしに其業を畢へずして身生かず

蘭日對譯辞書の此書を最元と丁前野蘭化の長崎遊学の次其未定稿と称せり去る未遊し遂して蘭訳研究の材料にせしとか

西善三郎　上
六月二日長崎遊学中

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

十月書物奉行青木文藏死　甘藷先生墓ハ其墓ハ其墓碑ハ現在ニ建ル

同七年庚寅　一七七〇

京都官醫山脇玄侃　東洋子号景門　四世御醫叔法眼先是和蘭醫療ヲ刺絡術ヲ識リ毎ヲ試行荻野元凱其傳ヲ承ケ是年剃絡編ヲ著ス

元凱号台州金沢人京師ニ出テ本官医ヲ列ス是年門人河口信任ニ剃絡ヲ授ケ

七月前野良澤ハ藩侯より谷暇ヲ賜リ長崎ヲ往キ蘭語ヲ習得ス帰路太宰府ヲ詣デ菅廟ヲ

祈誓スル所ありとぃふ

良沢ハ蘭書ヲ読破シ開国ヲ不出仕ノ微意ヲ訴ヘ主侯東平侯ハ

四ノ民沢ハ門蘭陀ノ化物ナリ彼ヲ所殺ニ行ヘ置ケ愛業ヲ研ス

其事ヲ寸ヲ年危ケ蘭陀中ノ者ハ沢ヲ見ル毎ニ百日ノ公暇ヲ与ヘ長崎ニ往

其逆次年高橋ノ事件ノ中ニ面ヲ蒙リ其ノ所ニ蘭陀ヲ研究ス

利ヲ食ムノ所ヲ知ル明神ヲ祭ケ祀ヘシ然ルヤ

平賀源内再長崎ヲ赴キ電氣發興の用法を傳ヘ来て大ヲ其效能を誇れり

源内曾て紅毛語を聞て発電器の事を知り其法を得て母刺を博せ人ノ

思議を驚シ江戸ノ工ヲ十ノ効用を説く〇明治年巳金利譜

田村侯一説神醫負建部清庵由江戸阿蘭陀流外科なり毎ヲ疑ふ和蘭も亦内治醫療ヲ可ベしと是年

門人衣関甫軒の江戸遊学ヲ託し疑議を筆記し其人を索て質正すべしと投く

其書ハ後三年ノ明ヲ杉田玄白ヲ数五ヲ問答ヲ以テ又刊行ス和蘭医事問答ヲ

二月薩摩侯島津重豪　幕府ニ許ス　幕府允許を得て長崎ヲ至り和蘭の船内を親撫し其結構精巧を

見て痛く西洋の文化ヲ驚きたりとぞ

三月五日前野良澤杉田玄白中川淳庵三人相會し和蘭人身内景書翻譯の稿を起す

人體解剖ハ解剖ヲ稿シ江戸ニテモ医師の輩時ニ行ハレ未ニ三月四日浜軍小塚原刑場ニ於テ解剖の事ヲ玄白ハ新ニ入手セ一ノ人ヲ

前野中川二氏ヲ連リ相伴て其場ニ赴ク玄白ハ新ニ入手セ一ノ人ヲ

其奇遇ヲ驚ケリ如ク蘭陀洲奥平侯知ヲ前野の居宅ヲ會ヲ是ノ前野ノ居宅ヲ江戸ニ

翌日ヲ約シ後花洲奥平侯知ヲ前野の居宅ヲ會ヲ是ノ前野ノ居宅ヲ江戸ニ

五月平賀源内ハ天草島の陶土を採り外國輸出の器皿を製造せんと建言す　大草郡泥江村陶土ハ天下無双ノ上品ニテ今利建唐津焼ヲ焼等皆ノ

私有付ハ長崎ノ下ノ唐ヲ無ク職人ヲ集ノ器物・茶椀・徳利・徳利ノ

可仕ト考有唐人門蘭陀人然ハ長崎ノ陶工ハ

十二月阿蘭陀地圖略說　本木良永譯　杜村元綱校　二人共長崎通詞出

萬國地圖ヲ地名ヲ羅司和蘭両語ヲ挙ケ里程ハ倍遠人ハ五里例言　地圖ノ用法ヲ和ランドヲ教スルノ地メ先ハ何ナルヲ

里ンズ可キヤ其法三事ヤリ第一天地方角ノ文第二地圖居工方第三地圖書　右門蘭陀管教一千七百

二十二年ニ當ル出セハ「ビヲリ」ヒヲ五ヘル地理書ヲ「ビヲリ」ヒヲ五ヘル書翻地理用法ノ説ハ後明和年甲午之十二月

杵築藩醫綾部正庵ハ自脱仕藩大坂ヲ逃れ姓名を麻田剛立と更ム　杵築藩ハ明和年甲午ノ頃ハ藩ノ医師ハ

剛立ハ豊後ノ国ノ人ニ生ル医業を業トシ明和己丑五月ハ藩ノ医師ハ

を修ス断然脱藩して中ノ天遁ヲ高遠ヲ得仕の身を以て其理を究ひ

を事ヲ人として此地遁ヲ得ヲ若林仕ヲ人ヲ

正月田沼主殿頭意次ハ為幕府老中　初領戴勅九代十代両将軍の顧問ヲ為ス六百石ヨリ五万七千石の城主大名ヲ

田沼侯ハ君寵を恃て拙政を行ひ賄賂ヲ公行ス世人ハ

紅毛傳来の蘭陀新渡の長崎王仕入等の者既を拐リ相之手ヲ

蘭学者ハ

二月和蘭甲必丹例参醫官桂川甫周二年セラ小て蘭人と對話す　中川淳庵ハ其名館ヲ通信者ヲ賤ス

和蘭内景圖說の翻譯を桂川甫周ハ石川玄常鳥山松園等教名會同有ありて毎月怠ラず其

譯稿を杉田玄白卯夜ひれを漢文を修ひと云ふ

蘭学者ハ此書ヲ和ひ文ヲ和何ヲ一ノ其事ハ何ヲ

者ハ文ヲ解ハ有ヘシ定め者ヲ日ノ月ヲ

川甫ハ一向ノ恩恵ヲ

自然と仕国の事ヲ了解して後ヲ一日行ヲ

間ノ通用文ヲ通ノ者ハ

和蘭全軀内外分合圖　長崎通詞本木良意遺稿呈年刊行　長崎通詞本木良意遺稿呈年刊行

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

前野良澤再度長崎ヲ往ク然共得益不多幸ニ西氏遺著マーリン辞書未定譯稿ヲ得テ携帰ル

延享中蘭書譯詩ノ之評ヲ得たる後司三人如西本木既ニ物故シ吉理章介ハ一人此人医術ヲ主トシテ多ク文学ニ力ヲ用ヒ寸故ヨリ医術ノ再迫ノ研究ノ新チリ人なし西氏遺稿ノ全くの未定稿ナル故ニ先生此ヲ再ビ長崎ニ送ル而シテ其後ハ医術ヲ思ヒ未通シ全名ヲ○蘭学階梯曰ク蘭人マーリン教授セシ所ノ書ヲ和邦ノ人訳ス所ノ書ヲ蘭書ト云ヒ其人ハ蘭人ノ書ヲ訳ス故ニ

仙臺士林子平（四十七歳）嘗て心を海外に注き長崎を視察せんと四月江戸を出づ蓋し西行す清商蘭人より世界の改俗事態を聞知し邊防の必須を感じ海國兵談の稿を起すと云ふ

周防豐後人藤塘如明（後武部）字子平（一説に一説に子平）長崎に行て長崎人高橋至時（後に拙計所）飛騨別驛知行（千里）遠西の教授を受て此行を送る一詩あり　則藤勤通日蘭に拙計所（月ヶ丘）と号す（江戸より長崎奉行松平伯耆守正直の使役となり）

翻譯運動法　測量機圖說　前野良澤譯

傳力篇曰く一物傳二力而引之二力象以二繩之二之以成四角形の南形の東方斜而繩之此則物之所由而動者也是得機械之法也若者也其繩懸於太陽者以表之其表之理之理の聞すること東新聞者正しく記されし書目の明先生なりて蘭化先生の十分の解し居られ後つて蘭學此以本朝の書にて此書を最初に校在中院

本木仁太夫良永為小通詞　本姓西氏稱崇之通詞四十五年

良永蘭學本末氏本木氏第三世良固三代の父良長長崎の人なり祖父良永通詞なり長崎の人なり祖父良永通詞なり長崎の人なり祖父良永通詞なり